

【最優秀賞】

いっぱい遊んで、いっぱい転んで

秋山瑞葉・香川県

雲ひとつない晴天が広がっている。まさにフリーマーケット日和だと奮い立ち、五平米にも満たぬブーススペースに雑貨を並べる。

「今日はよろしくお願ひします。子ども服のお店なんですね」

私と同じく一人で出店しているらしい、右隣ブースの女性に声を掛ける。悦子さんと仰るその女性は、小さなシャツを大切そうに畳みながら、にこやかに頭を下げた。フリマ出店が趣味になりもう二年が経つ。最近ではお客様とのコミュニケーションはもちろん、近隣出店者との会話も楽しみのひとつとなっている。女性一人で出店するとなると、お手洗いに行くのできえ誰かの協力が必要だし、何より六時間もの長丁場、セールストーク以外の世間話をしたい時もあるのだ。

「だいぶ風ぎましたね」

慌しい午前中が過ぎ客もまばらになると、悦子さんとお喋りする余裕も出来始めた。「私フリマ初心者なんです。その上一人だから不安だつたけど、楽しいわ」

悦子さんの左薬指に光る指輪を見て、今日は旦那さんは、と尋ねる。

「多分家で寝てるわね。よく寝るから、身長だけは高くて。おまけに瘦せぎすで黒縁眼鏡なんか掛けてるから、あだ名はウォーリー」

くすくす笑いながら悦子さんは、やっぱり商品を丁寧に畳んでいる。悦子さんのブースに隙間なく陳列されているのは、見ただけで女の子の服だと分かる、カラフルで可愛らしいデザインの物ばかりだ。

「娘さん、今お幾つかですか」

悦子さんは次のスカートに取りかかりながら、七つ、と答えた。

「生きていたらね。小学校に上がる前に、天国に行つたの」

悦子さんのひつそりと物静かな横顔を前に、しばらく言葉が出なかつた。

「服、売っちゃつていいんですか」

悦子さんは穏やかに頷いた。

「あの娘が亡くなつてから、私毎日あの娘の服を洗濯してたわ。春だから淡い色のスカートを、今日は寒いから厚手のフリースをつて、365日欠かさずコーディネートして。

でもある時気付いたの。過ぎていく季節に合わせてあの娘の服を考えても、服のサイズは五歳のままなの。私の手の皺は深くなるけど、あの娘がランドセルを背負うことは無いの」

その時やつと、前に進まなきやつて思ったの。そう呟く彼女の声は、凜とした意思に満

ちていた。

「あの娘の服を売るって決めた時、夫は大反対したわ。お前はあの娘の思い出まで奪うのかつて。今日の朝だつて、俺は絶対フリマには行かないからな、つてまだ反対してた」でもね、と続けて悦子さんは前を見据える。

「奪うわけじやないわ。もちろん捨てるわけでもない。この服達を別の子が着て、あの娘の分まで、あの娘ができなかつた遊びや学びをしてくれたらつて思つたの。その方があの娘も喜ぶと思つたの」

その時、一人の女の子が悦子さんのブースの前にしゃがみ込んだ。赤い水玉のスカートが気に入ったのか、小さな手に取つて持ち上げている。スカートならさつき買ったでしよう、と後ろから母親がたしなめる。

あげる。その様子を見つめていた悦子さんが、につり笑つてそう言つた。

「御代は結構です。その服差し上げます」

まあ、いいんですかと母親が驚きながら礼を言う。そして、あなたもお礼を言いなさいと娘の背中を押した。

「ありがとうございます。大切にします」

悦子さんは、舌足らずに感謝を伝える女の子の頭を撫でた。

「大切にしなくてもいいよ。いっぱい遊んで、いっぱい転んで、破れちゃつてもいいよ。この服がすぐに着られなくなるくらい、大きくなるんだよ」

穏やかな顔でそう言つて、スカートを畳む。そして一度ぎゅっと胸で抱き締めた後、母娘に手渡した。

それは決して、哀しい別れではなかつた。また遊ぼうねと亡き娘に、スカート越しに語りかける悦子さんの心の声が確かに聞こえた。

日も暮れ始め、フリマは終わりを迎えた。悦子さんの子供服はほとんど売れたようだつた。相場の半分ほどの安価で販売していたので、出店料を差し引けば儲けはごく僅かだろうけれど、彼女の表情は晴れやかだつた。

「これでビールでも買って帰ろうかな。早く仲直り、しなきや」

小銭入れから視線をあげた悦子さんの言葉が詰まる。終始穏やかな顔で接客をしていた彼女の目尻に、初めて涙が滲んだ。視線の先を辿ると、長身瘦躯の男性が立つてゐる。黒縁眼鏡の奥の目が、赤く潤んでいる。

春の訪れを感じさせる柔らかな夕方が、すぐそばまで來ていた。